

東大寺二月堂本尊「大観音」についての憶測

当館学芸部研究員 伊藤 旭人

奈良に春を告げる、お水取り(修二会)。この法会が行われる東大寺二月堂の本尊は「大観音」「小観音」と呼ばれる大小二軀の十一面観音像である。いずれも絶対秘仏のため拝することはできないが、『類秘抄』などの記録を通じて、その姿を窺い知ることができるといえる。

小観音は、頭上面を三段に表す珍しい十一面観音像であることは、描かれた図像によつてよく知られているが、大観音の方はご存知だろうか。ともに修二会の本尊であるにもかかわらず、実は大観音の図像として断定できるものは確認されていない。ただ、光背(図1)や天衣の一部は、江戸時代の火災以後、本体から離れて保管されており、これらから金銅製の等身像であることが分かる。今回は、大観音がどのような尊像であるのか想像してみたい。

さて、そもそも二月堂は『東大寺要録』巻第四によると、東大寺初代別当・良弁の弟子である実忠が開き、天平勝宝四年(七五二)に初めて十一面悔過を修したという。また天文十四年(一五四五)に製作された『二月堂縁起絵巻』では、生身の観音を求めた実忠が難波津で百日間の祈請により観音像を得得し、その観音像を今日の二月堂に安置して、天平勝宝四年に初めて十一面悔過を修したと伝えている。実忠感得の観音像とは小観音を指し、縁起の中で大観音は登場しない。

また、平安時代の巡礼記録『七大寺巡礼私記』によると、かつて小観音は、普段は東大寺の印蔵という倉に収められており、修二会の期間中にのみ二月堂に安置されていたことが記されている。つまり、二月堂本来の本尊は大観音で、小観音は修二会専用の本尊であったが、小観音が二月堂に常置されるようになったことで、小観音の縁起が二月堂自体の縁起として波及していったのだろう。では、本来の本尊である大観音



【図1】重要文化財 二月堂本尊光背身光(東大寺)

はいつ製作されたか、どのような尊像なのだろうか。

絶対秘仏のため、尊像の比較検討は叶わないが、【図1】に表された線刻図については、東大寺大仏の台座(蓮弁)の線刻図よりも製作時代が下るといふ見解が出されている。福山敏男氏は、天平宝字六年(七六二)正月から夏にかけて「銅菩薩所」で造られた「銅菩薩像」を二月堂本尊(大観音)に当て、二月堂の建立もこの時期と推定している。

次に尊容について『奈良六大寺大観』(東大寺二)によると、高さ六尺余り(約一八〇センチメートル)、聖観音ともいわれる金銅十一面観音立像で、二月堂内陣中央の岩盤上に立っているという。また、東大寺別当を歴任された平岡定海氏は、著作『東大寺辞典』の中で「天平期の金銅聖観音」と述べている。以上から、少なくとも大観音は蓮華座ではなく、盤石座上に立つ、ほぼ等身の観音立像と分かる。

十一面観音と聖観音がなぜ混同するのか不思議に思われるかもしれないが、想定される要因の一つに仏像の構造上の問題が挙げられる。一般的に十一面観音像の頭上面は、別で作ったものを取り付ける例がほとんどだからだ。分けて作られた部材は長い歴史の中で失われやすく、後世に補われた例も多い。大観音も、もしかしらたら頭上面が失われた十一面観音(つまり外見は聖観音)なのかもしれないが、実際に二月堂本尊として聖観音を表した作例がある。

二月堂は、寛文七年(一六六七)二月十四日の火災によつて、奈良時代以来の堂舎が残念ながら失われてしまった。しかし僅か二年後には再建され、徳川綱吉の母、桂昌院は御正体(懸仏)を寄進した。この御正体には、十一面観音ではなく左手に華瓶、右手は与願印を結ぶ聖観音が表されているのである【図2】。

記録によれば、寛文七年の火災の際、大観音は焼け落ちる二月堂のなかでひたすらに立ち続けていたという。秘仏であることから火災後すぐに帳で覆われたというが、もしかしらたら火災に耐えた大観音の姿が聖観音に見えたのかもしれない。

以上、二月堂大観音について、ひたすらに憶測を並べてみた。結論、いかなる姿であるのか定かではない。しかしながら、他見を許さない絶対秘仏という性格が、筆者の興味を掻き立てるのである。



【図2】二月堂御正体(東大寺)